
境界面上のトライスト

蒼乃黄昏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

境界面上のトライスト

【Nコード】

N8524U

【作者名】

蒼乃黄昏

【あらすじ】

<境界面上のシユタインズ・ゲート>に到達した鳳凰院凶真。

彼によって救われた牧瀬紅莉栖。

彼女が岡部倫太郎と再会するまでの、空白の二ヶ月。

（前書き）

執念救済

夢想探求

運命逢瀬

アテもなく彷徨う。

なんて言葉を、まさか自分自身で実践することになるなんて思ってもみなかった。

基本的に私の行動には明確な目的と意思が介在する。

この理由をもって、この目的に達するために、こう行動するのだ、という道筋の立った意思を媒介にして行動を実行する。そして解へとたどり着く。

解を導き出す為のあてがない時もある。けれど、そういう場面では思いつく限りの方法を試せば自ずと答えは見つかった。

時には、現状では解に辿りつくのは不可能である、との結論に至ってしまつて本当にアテがなくなってしまう時もあるが、それは構わない。私の職業柄——研究者として生きていく上でそういうことはよくあることだ。珍しいことでも何でもない。

なので。その場合はキッチンと諦めるようにしている。或いは時が解決するのを待つことにしている。なにもそれは恥ではない。固執して周りを見失うよりも、正しい行動であると自覚している。

それが牧瀬紅莉栖という人間の基本的な行動パターンであることは、これまでの十八年という人生の中で証明されている事実だ。

だから、今私がしていることは牧瀬紅莉栖の行動として矛盾して

いる。

最初のうちはまだそれなりのアテはあった。けれどアテのことごとくが功を成さずに無くなってしまった。

本来ならばそこで諦めるべきだと思ったし、論理的に考えれば今でもそうすべきだったと思う。

「でも、それはあくまで『本来なら』よ。そんなこと、今はもうどうだっていい」

誰に言い訳するでもなく、交差点を渡りながらボヤク。呟きは喧騒に飲み込まれて誰の耳に届くこともなく消え失せた。

既にあれから一ヶ月以上が過ぎている。来日した時の当初の予定であれば、もうとつくにアメリカに帰っている時期だ。というか、帰っていないければいけない。

自分の研究室でもスケジュールがあつたし、他大学から講師として招待されてもいた。ちなみにその講演の予定日は三週間前に過ぎている。

勿論その予定を忘れていたわけではないし、講演をすっぽかすことで自分がどれだけの損害を負うことになるかも分かっている。

教授や一部の心優しい先輩からは「らしくない。どうしたんだ」と何通もメールが届いた。

メンツを潰された大学からは苦情の電話がかかってきたし、研究室の同僚のうちの多数派はこれ幸いと私に対する態度を変えてく

るだろう。

今からアメリカに戻っても、来日前と同じ立場で研究に打ち込むことは出来ないかもしれない。周りが年上ばかりの環境で培われた処世術でようやく手にした立場と努力が水の泡、ということだ。

それでも、私はこうして手がかりもなくなった癖に意地汚く探し続けようとするこの衝動をどうしても止めることが出来ない。

いや、そもそも止めようという発想さえ浮かばない。

「あつ、すみません」

「ああ、いえ。こちらこそ、ゴメンなさい」

交差点の中央で、向かい側からすれ違おうとしていた通行人と肩がぶつかった。

何十人も人がごった返すこのスクランブル交差点で、肩がぶつかったぐらいで謝ってくれる人は少ないと思う。軽く会釈を返そうとして、ぶつかった相手の風貌に眼を取られた。

夏には少々不似合いなセピア色のジャケットに、やや運動不足な体型の中年男性。

背格好しか似ていないにも関わらず、私は私の父親の姿を連想してしまつて——不意に、7月28日に起きた人生最悪の出来事がフラッシュバックとなつて襲いかかってきた。

歯を食いしばってどうにか耐える。

二度と思い出したくないというのに、忘れることなんてできるはずもない残酷な記憶。

あの日のあの出来事は、一生消えない傷として私の心に残り続けることだろう。

本来であれば到底向き合える筈もない悪夢のような出来事。けれど、こうしてこの街を彷徨っている最中もあの日の出来事を思い返そうとしている私がいる。

正確には、あの日の出来事に介入してきた、誰かも分からない恩人の姿を思い返そうとしているのだ。

何か他に手がかりとなるものはなかったかと、何度も何度も記憶に呼び起こす。

そんなことをしても、もうあの日の記憶から得られる手がかりなんて全てあたたかあとなのに。今更新しい手がかりが得られるはずもないのに。それなのに私は、ああもうホントに自分の意地汚さに呆れなくなってきたというのに、私は今もこうしてアテも無く彷徨い続けている。

どうしてだろう。

本当にどうしてだろう。

これほど自分の行動が思い通りにならないなんて思っても見なかったし、こうしている今も自分自身信じられない。

でも不思議とこうしている自分を諫める気にはなれなかった。諦めるなんてあり得ない、と私の中で叫び続けている自分がいるのだ。だから私は諦めずにここにいる。私は、明確な意思と目的を持って彷徨っているのだと自分自身を無理矢理に説得する。

まだアメリカには帰るわけにはいかない。どうしても、この街に居続ける必要がある。

そのことにだけは『どうしても』なんて言葉は必要ない。

決まりきっている。

会う為だ。

あの人に。

本名も知らないあの人に会う為に。

会いたい。会わなければならない。一度でいいから、私はあの人にどうしても会わなければいけない。

それをするまではアメリカに帰るなんて論外だ。

私には……牧瀬紅莉栖には、あの人に会ってどうしても伝えなければいけない言葉がある。

だから。それだけの為に。私は今もこの街にいる。

今日は2010年9月16日。

時刻は15時14分。

天気はうんざりするほどの晴天。

私は今、秋葉原にいる。

彼に会うため、此処にいる――。

+

+

あの出来事の翌朝、私はベッドの病院の上で目を覚ました。

血塗れの姿で運び込まれたという話だったが、私に外傷らしい外傷は無かったらしい。

確かに私の体には何の傷跡も無かった。自分でそれを確かめて、安堵するように息をつき……そしてその直後、全身が強張ると同時に胸を締め付けられる感覚が襲ってきた。起きたばかりだというのに勝手に働き出した私の脳が、純粋な疑問を私の胸に突き刺してくる。

無傷なのに、私は何故血塗れになっていたのだろうか。血塗れというにはおびただしい出血に違いない。私を真っ赤に染め上げたというその大量の血液は、一体誰が流したものののだろうか。誰がそれほどの怪我を負っていたのだろうか。

その疑問を解決しようと、半ば自動的に気絶する寸前の記憶が呼び起こされた。

私の脳裏に映し出された映像——そこには銀色のナイフを深々と突き刺された白衣の青年の姿があった。

それを思い出してからの十分間を、私はよく覚えていない。

パニックになっていたんだと思う。喚き散らしはしていなかったらしいけれど、今にも叫び出して暴れだしそうな様子だったらしい。看護師が言いにくそうな顔をして、後からそう教えてくれた。

自分を擁護するわけではないけれど無理もないと思う。話を聞いた限りでは致死量に達するのではないかという程だったのだから私を病院に運び込んだという救急隊員に話を聞くところによると、私が倒れていたラジ館の床にもそれ相応の血痕が残されていたらしい。

普通に考えればまず死んでいる。

その結論に達しかけて、溢れそうになる感情を理性で無理矢理抑えこんだ。まだそうと決まったわけじゃない。結論するのは何もかもを確かめてからにするべきだ、と自分を叱咤する。

つい今しがた起きたばかりだというのに遠慮も何も無かった警察の聴取には「気絶していて覚えていません」の一边倒で押し通した。「些細なことでもなにか覚えていることはありませんか」と追求されても「何も覚えていません」と断として答えた。

聴取の端々で警察官から情報を抜き出したところ、なにやら私が血塗れで倒れていたという情報だけが先行しているらしい。最近サイエンス誌に名前が載ったばかりとあってさすがに新聞沙汰程度にはなるかもしれない。けど、警察やしつこい報道関係者に拘束されるわけにはいかない。だからこそ論理感と義務感を振り切って、覚えていないの一言で乗り切った。

何故かはわからないけれど、拘束されている暇なんてない、と焦燥している自分がいたからだ。

だから被害届を出すつもりもなかった。第一発見者が通報したということで警察も一応の調査ぐらいはするだろう。けれど、明確な被害者も加害者も凶器も見つかっていない状況で捜査が進展するとは思えない。被害者側からの働きかけが無い限り、この事件が解決されることはないだろう。

結局のところ、警察に分かっていることといえはなんてことはない。先行している情報と同じ『牧瀬紅莉栖がラジオ会館で血塗れになって倒れていた』という程度のことだけらしい。つまり加害者は、ドクター中鉢は誰にも見つからずに逃げおおせたんだろう。

無意識に胸を撫で下ろす。

撫で下ろして——絶句するほどの嫌悪感を感じた。

その何でもない仕草でしかない行為を、私の心は全力で拒絶していた。

何に対しての拒絶だろうか。

娘を殺そうとした父親を庇ったから？

殺人未遂犯を庇ったことに対する自己嫌悪？

それとも——よりもよって『彼』を刺した人間を案じてしまったから？

「……………」

吐き気を堪えるように口に手をあてた。

今、私は考えてはいけなことを考えた。少なくとも現時点では考えてはならないことだった。

つい先日起きた悪夢のような出来事。これを機に昔のようにと、一縷の望みを託した7年間分の想いが最悪の形で踏み躪られた現実。あんな出来事、直ぐに向き合えるわけがない。耐え切れるもんか。

これは言い訳？ 自分の弱さを恥じている？ それとも人間性を疑っている？ 誰の？ 私の？ 彼の？ パパの？

駄目だ、もう考えるな。お願いだから考えるな、私。

培ってきた技術と知識を総動員して自身の思考、その矛先を異なる場所へと向けさせる。

それから一時間、私は自分自身の思考を誘導制御することに苦心した。

+

+

「あの人、どうなったのかな……」

培ってきた知識と技術と経験を元に制御した私の思考は、最終的にはここに導かれて着地した。

あの人。

ラジオ会館の階段の踊場で、初対面の私に意味ありげな言葉を言ったあの人。

タイムマシン発表会から連れ出した廊下で、電源の切れたケータイで会話をしていたあの人。

従業員用の仄暗い通路で、私を助けてくれた、あの人。

「被害者はいない。加害者も見つかってない」

ならあの方は。

ドクター中鉢にさ、刺さ、刺、刺された、彼は。

どう、なったん、だろう、か。

「……落ち着け……落ち着けて言ってるのよ……！」

気を抜いた途端、荒海に飲まれる感覚を見た。歯を食いしばり、自我に鞭を打つ。

まず情報を集めることにした。考察の基盤が疎かでは時間を無為にするどころか誤った方向に迷い込みかねない。

とりあえずは新聞からだ。大した情報は載っていないかもしれないが、世間の見解とあの後の現場状況ぐらいは読み取れるかもしれない。

そうと決まれば即行動だ。

寝ている間に着替えさせられていた病院服のまま、ベッドを降りて備え付けのスリッパを履く。

少々手狭な病室の扉に手をかけ——部屋の片隅に置かれた血塗れの服が——見なかった。私は何も見ていない。今は見てはいけない。まだ駄目だ。だから何も見ていない。

扉の取っ手に手をかける。扉を勢い良く開ける。逃げ出すように病室を出た。

売店まで行く途中に「病院では走らないで」と子供みたいに注意を受けた。

+

+

とりあえずは有名所の新聞を三つほど買ってきた。

病室に戻った際は、まっすぐにベッドだけを見て突き進んだ。『アレ』はベッドで寝た状態からすると、頭の更に後ろの方に置かれている。隅に畳まれて置かれてあるので、一度ベッドに上がってし

まえば視界には入らない。

だから何も見えない。私は何も見ていない。見るべき物。そうだが、新聞だ。私は新聞を見るために買ってきたのだ。

とりあえずは一枚目。一面、二面、三面と捲っていったようやく目当ての記事を見つける。注意しなければ見つけれない程に小さな記事につけられた見出しには、ゴシック体でこう書いてあった。

「天才少女、ラジ館で何者かに刺される」……ひどいタイトル」

天才少女刺されるって……もう少しマシな見出しは思いつかなかったんだろうか。これを思いついた執筆者とそれを採用した編集者の頭はどうかしてるとしか思えない。或いはこれも様式美の一種なんだろうか。

一分もしない内に読み終わる。記事は数行しかなかった。その内容はあまりにも簡潔で、読み取れる情報は思っていたよりも少なかった。

第一、見出しからして既に間違っている。血塗れで倒れていたのは確かに私だ。けれど本当の被害者は私じゃない。ナイフで刺されたのは私ではないのだ。

刺されたのは……そう、“私の父親”に刺されたのは――

「……ッ」

こみあげてくるものを喉元で堪えた。

叫びだしたくなって、逃げ出したくなって、その衝動を寸での所で抑えこむ。

逃げてはいけない。

どれだけ逃げてもその事実はなくなくなるわけではないし、いずれ追いつかれてどうしようもなくなる。どれだけ苦いものでも、向き合わなければいけない。

さすがにあれだけの出来事にすぐに向き合うのは無理かもしれないけど、逃げることだけは絶対に、絶対に許されないことだと思う。なぜならあの人は、決して逃げようとはしなかったのだから。

「……冷静になれ、私」

そろそろ慣れない形の逃避も限界に近い。

覚悟を決めるために二、三度深呼吸をした。

スーハー スーハー、と手振りまでつけて深呼吸する。まるで小学生がやる体操みたいで僅かに羞恥心を覚えた。

羞恥心なんてものを呑気に感じたということは、少しは正常な牧瀬紅莉栖に戻っただろうか。

どうだろう。

けれどどちらにせよ逃げないと決めた。決めざるを得なかった。彼のあの姿を思い出してなお逃げようと思えるほど、私は人間とし

て不出来ではない。

覚悟は決まった。

首を回す。そして視界を後方へ。ベッドの後ろ、部屋の隅。そこに置かれたお気に入りの服を見る。

あか、赤い、血に、あの人、の血に。血に塗れた、お気に入りの服、を見る。

血。血だ。真っ赤だ。真っ赤な血、に染められて赤い服、になっている。

「――」

落ち着け。落ち着け。落ち着け。

合言葉を三つ唱えて再び深呼吸を……駄目だ、喉が蠕動している。息を吸えない。軋む胸に両手をあてて抑えこむ。

大丈夫。大丈夫だ。大丈夫に決まってる。大丈夫と思い込め。

少なくとも逃げるな。絶対に逃げるな。今ここで逃げてみる。二度とあの人に顔向けできなくなる。

ひたすらに自制の為の言葉を念じ続けること三分間。私はベッドの上で硬直していた。

今まで脳科学者として培ってきた知識と経験を総動員して自己の意識を制御する。それでどうにか、曲がりなりにも精神状態をフラ

ットに保てた。

ふと手元に目をやる。手に力が入りすぎていたのか、握り締めていた新聞はしわくちやになっていた。皺をなるべく元通りに戻して新聞にもう一度目を通す。

万が一にも見落としがあつてはいけない。少しでもいいから情報を、と私は小さな文字に目を走らせ続けた。

新聞との格闘はそれから数時間ほど続いた。

+

+

結局、新聞には大した情報らしい情報はなかった。

安静の為にもう一晩入院しておいたほうがいいですよ、という医師の忠告を固辞して、病院のエントランスホールを抜ける。

昨日この病院に運び込まれた救急車は一台きりで、乗せられていたのは私だけとのことだった。

なら、あの人はこの病院にはいない。きっと別の病院に運び込まれたに違いないだろう。その安否を確認しなければならぬ。助けられた私にはその義務があった。会って無事であることを確認して、そしてお礼を言わなくてはいけない。

病院の屋外に出ると同時に携帯の電源を入れて、近くの病院を検索する。

三件、頻繁に救急車が行き交っている大病院が検索に引っかかった。

「あ、柳橋病院ですか。昨日そちらに運び込まれた患者さんがいると思うんですけど、失礼ですが……いえ、違います、そんなのじゃなくて……。あ、そうですか……。いえ、ありがとうございました」

一件目はハズレだった。続いて二件目、三件目と電話をかけても帰ってくる反応は皆同じ。

そんなハズはない、と衝動的に思った。あれだけの怪我をして、病院に運び込まれていないはずがない。けれど事実として、あの日に救急車で搬送された患者はいないのだと、三つの病院は口を揃えて言った。

ひよつとしたら電話だと警戒されて本当のことを教えてもらえないのかもしれない。最近は大変でさえプライバシーにはうるさい上に、医療関係ともなれば尚更かもしれない。そういえば電話の受付には随分渋られたし怪しまれもした。

ならば、と直接三つの病院それぞれに足を運んでみたものの……結果は同じだった。自力で病院に駆けこんできた瀕死の男はいなかったか、などと馬鹿みたいな質問をしたりもしたが、どの病院の受付も呆れたように首を横に振った。当然の反応だとは思う。

最悪の結果が頭をよぎった。

「あの怪我で……無事なハズがない」

血が噴き出すほどの深い傷だった。

生命に関わる傷だった。

すぐにでも処置を施さなければ確実に死んでしまうだろうと、素人目にも分かってしまうほどの重傷だったのだ。

なのに病院にはいないという。

それはつまり、治療が施されないまま、彼は、あのまま――

「そんなワケない!!」

大通りのど真ん中で大声を出してしまった。案の定、通行人から一斉に奇異の視線が向けられる。我に返って足早にその場を去った。

そうだ、そんなワケない。理屈なんかない。けど、それでもそんなワケない。そんなことがあってはならない。

確かにこの近くの病院にはいなかった。けど、ひよっとしたらもつと遠くの病院に運ばれたのかもしれない。頭のどこかで冷静な自分が、それこそそんなワケあるか、と告げてきたが無視した。

携帯のWebで広範囲に検索をかけると、今度は大小合わせて十四件の病院が対象にあがってきた。ここからは結構距離がある。徒歩じゃ無理だな、と判断してタクシーを呼び止めた。

出費はきついけどそんな些事にこだわってられない。まず一件

目の病院名を運転手に告げて、シートに体重を預けた。

ひょっとしたらあの人が歩いていたりはないかと、窓の外の通行人に目を走らせているうちに最初の病院についた。

それから丸一日。十四件の病院を全て回り終えるまで、私は同じ行動を繰り返した。

+

+

翌日。

近くの病院にはあの人がいないという事実を認めて、重い足取りでそこを目指した。

重いのは足取りだけではなく気持ちもだ。まさか自分がこんなに大胆かつ軽率な人間だとは思わなかった。

苦々しい思いで、黄色いテープを乗り越える。テープには『KEP OUT』という文字が太字で書かれてたりしたけれど無視した。

人に見つかりはしないかと内心冷や汗を掻いたが、今のところ警備員が飛んでくる気配はない。

胸を撫で下ろして、従業員通路の奥へと進んだ。わざわざ犯行現

場に戻ってくる馬鹿な犯人の気持ちが理解できそうになってげんりする。

世界のラジオ会館。通称、ラジオ館。

ドクター中鉢がタイムマシンの完成記者会見を行った場所。パパ——私の父親、ドクター中鉢と数年ぶりの再開を果たした場所でもあり、そしてあの人が刺された場所でもある。

通路の角を曲がると、そこにも更に『KEEP OUT』のテープが張られていた。なるべく部屋を荒らさないように慎重に足を踏み入れて……危つく悲鳴を出しかけた。

——凄惨な現場だった。

予想はしていても実際に目で見ると生々しさが伝わってきてしまつて、思つた以上に衝撃を受ける。

“そこは一面が血の海に染まっていた”——そんなチープな描写を実際に目にする事になるなんてどうかしているとは思えない。けれど事実だ。ここは私が気を失つて倒れていた場所に間違いない。もう乾ききってしまった血溜まりの中に人一人分ぐらいの空白があつた。

冷静になる為に、私は考えを声に出して推測する。

「私はここで気を失つて倒れていた。気絶した原因は……状況からしてどう考えてもあの人の仕業よね」

一度思考を整理するために、ひとつひとつあの人の記憶を思い返してみた。

まず初めて会った時のこと。

ラジオ会館の屋上へと続く階段の踊場で私と彼は初めて出会った。

パツと見の外見年齢と実際年齢には差があると思われるその顔立ち。なんという顔つきが若者のそれとは思えなかった。いや、顔つきというより面構えとでもいうのだろうか。何十年も生きてきたような、そんな重厚な印象を受けたように思う。

それを考慮して若く見積もって考えると……うん、恐らく年齢的には二十代半ばといった所だろう。それ以下はまずあり得ない。

次にタイムマシン完成記念会見場から連れ出した廊下でのこと。

一度目の時と比べると別人のように軽い印象を受けたものの、外見的特徴は完全に一致した。同一人物、のはずだ。なのに、私はどこか強烈な違和感を覚えていた。ワケの分からないことを一方的にまくし立てられたからだろうか。

そして三度目、最後に会ったのは薄暗い従業員通路でのこと。

まるで待ち構えていたかのように、彼はその場に現れた。

そして無茶苦茶なことを捲し立ててドクター中鉢を挑発して、あのままであれば私に突き刺さることになったであろうナイフで彼は刺されて、私はどうしたらいいのかも分からずとにかく止血をしようとして……。

そこで私の記憶は途絶えている。医者というところには、微かな電紋があるのでスタンガンでも食らったのではないかとのことだった。

以上が、私と彼に関する出来事となる。

それら彼の行動を簡潔にまとめてみるとこうだ。

1・初対面にも関わらず意味深な台詞を呟いたかと思えば突如走り去り。

2・会見場から連れ出した際には電源の切れたケータイ相手に電波言語をまき散らしていて。

3・従業員通路では突如修羅場に割り込んでくるなり二人とも殺してやるだとか言い出したりして。

4・最終的には駆け寄ってきた私にスタンガンを食らわせて気絶させた。

以上。

「……え、なにこれ」

ちょっと待って。とにかく待って。おかしい。なんか私の中にあつたイメージとちょっと違いすぎる。

あれ。どうしよう。

冷静に考えてみるとあの人、変だ。

まず外見。何十年も生きてきたかのように老成されたかなりの老け顔。いや、それはいい。それは一先ず置いておく。それよりも服装だ。

なぜ白衣？

それに尽きる。確かに研究者である私にとって見慣れた格好ではあるが、それは大学や研究室限定でのこと。病院でも見るけれど、その白衣とは違うのでこの際考慮しないことにする。どちらにせよ屋外で着るようなものではない。ドクター中鉢の発表会の為にわざわざ着てきたとも思えない。

そして最初の出会いの別れ際。

ラジ館の四階、階段の踊り場で、すれ違いざまに私の頭を撫でていった。あまりに唐突すぎる行為で一瞬思考が止まってしまつて、その隙にあの人は走つてその場を去つた。しかも呆氣にとられるくらしいの全力疾走で。おもいつきり挙動不審者だ。

その時にかけられた言葉が、確か――

『俺は、お前を助ける』

……繰り返しになるけれど、おもいつきり初対面である。初対面でこの台詞である。

そしてパパ――ドクター中鉢に叩きつけた名乗り上げはこうだ。

『いいだろう、そこまで言うなら教えてやらんでもない。我が名は――鳳凰院凶真――！』

ホウオウインキョウマ。フェニックスの鳳凰に、院、そして凶悪なる真実。で、鳳凰院凶真らしい。

何故字がわかるのかというと、本人自らが丁寧に説明していたからだ。『フーハハハ！』という、なんかアレな高笑い付きもセツトでついてきた。

以上の情報を冷静に咀嚼し直して、解を導き出す。思考には数秒と要しなかった。

うん。

結論。

あの人、頭がオカシイ。

「解終了……って、待たんか私！」

これはヒドイ。幾ら何でもその結論はないだろ私。命の恩人に対してどれだけ失礼な考察をしているんだろうか。恩知らずってレベルじゃない。

「いや、けど鳳凰院凶真って。本名……なワケないわよね」

本名だったらなんかアレすぎて凄いと思う。もし仮に本当の本当に本名だとしたら無礼極まりないけれど、それが嘘偽り無い感想だ。

だからアレは十中八九偽名だろう。いや、確実に偽名だ。根拠も無いのに確信するなど普段の私であればあり得ないことだけれど、偽名だと分かっていた。

なぜ？ 直感？ ふと疑問が首をもたげるが今は捨て置く。偽名を名乗る理由なんて物騒な発想しか浮かばなかったけれど、ともかくアレは偽名なのだ。私はそれを知っているんだ。

けど偽名にしたってそのネーミングセンスはどこから来たのだろう。

だって『鳳凰院凶真』だ。バツキバキにアレなネーミングである。というか鳳凰と凶真は説明しておいて院はスルーとかどういうことかと。

「そういえば神に等しい力とか、魔眼だとかも言ってたっけ」

そう、たしか――。

「魔眼 ”リーディング・シュタイナー”」

呟いてみた。

そして一瞬で後悔した。

なにこの名称。恥ずかしすぎる。そもそも何で英語とドイツ語が混ざってるのか。無茶苦茶だ。

「後はたしか、貴様もそっちの娘も全員皆殺しとか何とか……」

……………あれ。

本当にどうしよう。

あの人の言動、片っ端から破綻しまくってる。

一つ一つの記憶を呼び起こして冷静に考えると、直接的な表現がはばかられるが、かなり重度のアレな人間以外の何者でもない。

第二次性徴——いわゆる思春期に発病しやすいとされるアレ。

より厳密に言うならば中学二年あたりで罹ってしまいがちな精神的奇病。

しかもスタンガン装備バージョン。

イタイだけでなくヤバい人間に分類されるような気がする。というか、分類される。

「……………でも、それならどうして私を庇ってくれたの？」

そっちの娘も、というのは間違いなく私の事だ。彼は皆殺しにしてやると言っていた。あの人は、私も殺すとそう口にしていた。

けれど、実際には私は生きている。しかもほぼ無傷で。

もしあの人があの場に現れなければ、私はきつとこうして生きていられなかったんじゃないかと思う。いや、出来なかったと確信している。

パパはナイフを持っていた。アメリカから娘を呼びつけたパパは、ドクター中鉢は、ナイフを持って待っていた。どう使ったものだったのかなど考えるまでもないし考えたくもない。

けれどそのナイフは私を傷つけることなく、修羅場に自ら踏み込んできたあの人に。まるで身代わりとなるように、あの人の胸に突き刺さった。

——“牧瀬紅莉栖は『彼』に救われた”

これだけは絶対の真実だ。

だから先程までの私の考察は間違っている。

何も分かっていない状態を考察の始点におくなんて、的はずれな解に行き着くのは当たり前だ。

だから、正しくは逆。彼は私を救ってくれたのだというただひとつの真実を始点として、そこから逆算して推測しなければいけない。

「彼は私を助けてくれた。もし本当に私たちを皆殺しにするつもりなら、スタンガンなんかよりもっといい道具なんて幾らでもある。それに、私を気絶させただけでそれ以上は何も手出しをしていないし、ドクター中鉢もちゃんと生きていて亡命騒ぎなんてものをやらかしている。その事実からも、あの時言った言葉が嘘やハッタリの種類だったのは間違いない」

というよりも“演技”と言うべきだろうか。

わざわざ自分を悪役に仕立てあげたがってたように思える。

「なら、あれはやっぱり挑発よね。ドクター中鉢を怒らせるための挑発。その為にあんなことを言った。だとすると、なんでドクター中鉢を怒らせたかったの？」

答えは簡単だ。挑発とは自分への敵意を煽る為の、敵意の向け先を自身に固定させる為の行為だ。

なぜ彼はナイフを持った人間を挑発したのだろう。

決まってる。その切っ先を、自分に向けさせたかったからだ。ドクター中鉢の敵意の矛先を、私から自分に移し変えたかったから。だからあんな挑発をした。

「あの人は……私を庇ってくれた」

一つ、理論補強の材料が増えた。

「なんで？ 見ず知らずの、あの日初めて出会っただけの私を、なんで助けてくれたの？」

しかも身を呈してまで。

そこまでの理由が分からない。見当たらない。

「それに、あの時間にあそこに居たのは何故？ 従業員通路なんて普通なら立ち入ることのない場所。そんな所にタイミング良く現れるなんて、そんな偶然起こりっこない。もし偶然だったとして、ス Tangan を持っていたのは何故？ そんなの、用意が良すぎる。ス Tangan を日常茶飯事に持ち歩いてたって言うんならまだしも、

そんなワケ——」

……あの人なら、あり得るかもしれない。

いや、落ち着こう。また推察の方向性がずれつつある。軌道修正をしつつ、改めて思考に没頭する。

ずっと気になっていることがあった。

なんであの時の私は彼に駆け寄ろうとしたのだろう。

結局はスタンガンで気絶させられてしまったけれど、よくよく考えれば私の行動もおかしい。

皆殺しにしてやると言っていた言葉が演技なのは分かる。けれど、それもあくまで今から考えればの話だ。あの時の言動だけを抜き出せば立派に危ない人の範疇に入る。あの時点では『皆殺し』という言葉が本当である可能性もあった。

なのに私は、救急車を呼ばなければ、と思った。

あの場の状況からすると危険人物でしかないにも関わらず、それを気にもとめずに治療をしようとした。

体を横にさせるぐらいのことしか思いつかなかった私は混乱の極みにあったとしか思えないけれども、『お前を殺す』と宣言している相手を、咄嗟とはいえ助けようと駆け寄るだなんて無用心にも程がある。

結局は助けられたのは私の方だったけれど。

なぜ私が咄嗟にとつた行動が、彼を助けることだったのか。

「おかしいことは他にも沢山ある」

例えば、私が血塗れで倒れていたこととか。

実際には私が出血していたわけではなかったけれど、傍目には私が血を流して倒れていたようにしか見えなかったらしい。なぜそのような演出を施したのか。

例えば、私がスタンガンで気絶させられていたこととか。

私に害を及ぼす意図があつたならまだしも、あの人のとつた行動は私を助けるためだったことは既に分かっている。なら何故私を気絶させる必要があつたのか。

考えればキリがない。

けど、本当に気になっていることはひとつだけ。

眼を逸らし続けていたソレと直視するしかなくなって——私はそれを意図的に口に出す。

「胸を刺されて、あんなに血が噴き出たのに……なのに何で病院にいないの？」

何故彼は病院で治療を受けていないのか。

治療を受けていなければ。

助かるはずがないのに。

「だったら……！ だったら、まだ探してない遠くの病院にいる筈！」

いるわけがない、と忠告する理性を拒絶して従業員用の部屋を後にした。

携帯を取り出してWebの検索エンジン呼び出し、昨日よりも更に広範囲に検索をかける。何れも交通機関無しでは困難な距離だ。財布の中身を確認すると現金が少しもなかった。途中でコンビニにでも寄ってお金を下ろす必要がある。

ラジ館を出て大通りへ。タクシーを呼び止めようと手を上げかけたが、自重した。ここは電車で移動するべきだろう。節約する必要があるが。

検索に引つかかってきた大小合わせて五十六件の病院、全てを回る必要があるのだから。

+

+

棒のようになった足をどうにか動かして、ホテルの自分の部屋に倒れこむようにして帰った。

着替える気力もなくベッドに倒れ込む。

「あ、足が……」

プルプルと震える足を抑えて呻く。こんなに歩いたのはいつ以来だろうか。頭脳労働者には完全なハードワークだ。

今日も今日とて成果無し。ラジ館を中心に搜索範囲を広げていつでもこの病院にもいなかった。ラジ館を中心に半径15キロまで搜索範囲を伸ばしても見つからなくて、私はようやく認めることにした。

あの人はどの病院にも搬送されていないのだ――と。

そんな患者はいない、と言われ続けて既に二週間が経っている。いい加減、考えを切り替えるべきだろう。

病院にいないのは分かった。

もうそれを手がかりにしてさがすことは出来ない。だから今度は病院以外であの人がいそうな所を探すのだ。

「となると、あの人の素性の調査になるのか……プロファイリングが必要そうね」

病院にいないなら助かっているハズがない、などというロジックは無視する。

あの人は生きている。

絶対にどこかで生きている。

だから私は会わなければならない。

会って、お礼を言わなければいけない。

「あの人の特徴……まず白衣を着てること。ということは研究職についている、もしくは何らかの形で研究に關与している人物の可能性が高い。背は170センチ後半で、歳は大体二十代後半から三十代前半つてとこだろうから……そのあたりから探っていけばいいか。まずは大学の研究室からね」

性格がちよつとばかり特徴的な人だろうから、もしそんな教授や研究員が居るならば特徴を伝えれば直ぐに分かってくれるだろう。

講演を頼まれていたATFの参加大学を、とりあえずは東京電機大学を伝手に片っ端から電話をかける。根気よく、延々とかけ続ける。

その行為は一週間ほどは続いた。

+

+

「……………疲れた」

ホテルに帰るなりベッドに倒れこみたい衝動を我慢して、服を脱ぎ捨てた。

動かすのも億劫な体に鞭を打ってシャワーを浴びる。冷たいシャワーの水が少しだけ私の精神を落ち着かせた。

耳が痛い。頭も痛い。一言も聞き漏らすまいと、携帯を必要以上に耳に押し付けていたのが原因か。それとも案外、丸一日中電話をし続ければこうなったりするのかもしれない。どうでもいい。とにかく今は疲れていた。

いい加減に身体を拭いて、備え付けのバスローブを肩にひっかけた。そのまま下着もつけずにベッドに倒れ込む。ちゃんとした着替えをするだけの気力すらもう残っていない。

肉体的には勿論、精神的にもかなり疲弊していた。病院はダメ。大学もダメ。伝手のある限りの研究機関に問い合せてもそれらしい人物の該当なし。

あまりに同じことを繰り返すすぎて、電話の問い合わせ方も既にテンプレート化している。今なら緻密な問い合わせマニュアルを三分で書き出すことだって出来るだろう。

「……ねえ、なんでいないの？」

記憶の中のあの人に問いかける。

経過時間的にそろそろ記憶の姿にもやががかつてもよさそうなものだけれど、あの人の姿は驚くほど容易に、かつ鮮明に脳裏に描き出すことができた。

何故だろう。いくら長期記憶として印象に残っているとはいえ白衣のヨレ具合まではつきりと思い出せるのはやや不自然に思える。

おかしいな。

なんでだろう。

こんなのはおかしい。

なんでだろう。

本当になんでだろう。

本当に。ああ、本当に――

「なんでいないのよ!!」

枕を驚掴みにして、壁に投げつけた。

ボスン、と間抜けた音を立てて叩きつけられた枕が床に落ちる。そんな音さえ気に触った。投げつけた動作で肩にひっかけていただけのバスローブが落ちて裸があらわになる。それでも着直す気にすらなれなかった。

「病院は探した！ 外科だけじゃなく内科だって探した！ 警察にだって事情を説明して捜査してもらった！ なのに見つからなかった、それらしい人なんていなかった！ 大学も、研究機関も、アテになりそうな所は全部探して、大学だけじゃなく高校だって、果ては中学校の教員まで全部……！ 全部全部全部全部探したのにつ……！」

ヒステリーを起こしている。そう自覚してはいたけれど、だから何だと思った。

このホテルはそれなり上等なところで壁は薄くはない。それでもこれだけ大声を出したりすれば廊下にまで響いてるはずだ。ひよつとしたらホテルの使用人あたりが飛んで来るかもしれない。

知ったもんか。

溜まり溜まったモノは限界をとくに越えている。

どうでもいい。どうでもいい。何もかもがどうでもいい。

「なんで見つからないの！？　ねえ！！　なんでどこにもいないのよおッ！！」

もう嫌だった。

ついこの間まで、アメリカで変わらない日々を送っていたというのにこの有様は何だろう。

苦心して創り上げた論文に一縷の望みを託して父親の講演に行ってみれば、あるうことがナイフを持ってお出迎えときた。

父親らしくはなかったけれど、れっきとした科学者だと信じていた筈のパパは私の論文を盗もうとして。

それを指摘されたパパは私を殺そうとして。

そうしたら、さっき会ったばかりの彼が何もかも知った風なことを喚いたりして。

頼んでもいないのに修羅場の中に割り込んできて。

逃げてって言ったのに無視して刺されて。

私の代わりに死ぬ程の怪我を負って。

それをしたのは私の父親で。

私は最後まで見届けることすら出来なくて。

目を覚ました時には何もかもが終わっていて。

あの人は何処にもいなくて。

私は、私は、私は……

「……私、最低だ」

私はこんなホテルの一室で、あろうことが恩人であるあの人に対して理不尽な鬱憤を喚き散らしていて。

そんな何処までも我儘で自分勝手な物言いに、自己嫌悪の坩堝に落ちた。

もう何もかもから逃げ出したくなって。

何もかもぶちまけてしまいたくなって。

ついには消えてしまいたくなり始めて。

そして最後に残ったのが、

「……会いたい……」

そんな自分勝手な願望。

何もかも放り捨てて残ったものが、これ。

それが牧瀬紅莉栖という人間の本心。本音。

……何がお礼を言わなくちゃいけないだ。

ふざけるな。

口をついてでた言葉が『会いたい』という時点で、それは既にただの建前と化してしまっている。

そもそもお礼を言う為に捜すという理由そのものが、パパとのトラウマから目を逸らすための口実だったんじゃないかという疑いさえある。

なんて自分勝手。

恩人を利用してまで現実から目を逸らして逃げようというのか。

なんて恥知らず。

それらを全部抜きにして、それでも会いたいという気持ちを捨てられないのか。

なんて独りよがりな願望。

牧瀬紅莉栖という女はどこまで独善的なんだろうか。

死にたくなつた。

「……っ、……ひっ……ふえ……」

涙まで溢れてきた。

泣くのは——こうして声を押し殺して泣くのはいつ以来だろうか。

もう随分前のことだと思う。高校や大学で妬み誹りの嫌がらせを受けたときは、歯を食い縛って耐えていたと思う。意地でも泣いたなんてしなかった。

だからきつと、あの時以来だろう。

パパの誕生日プレゼント用にと、私は貯めてきたお小遣いをつぎ込んでネクタイを買ってきた。

普段でも使ってもらえるように、あまり派手にならないようにと選び抜いた一品を箱に入れて、丁寧にラッピングしてもらって、誕生日の夜にパパに渡した。

気に入ってくれるだろうか。普段でも使ってもらえるだろうか。大切にしてもらえだろうか。

そんな淡い期待を抱いていた頃の思い出だ。

その誕生日の翌朝。

綺麗にラッピングされていた筈の箱が、ぐしゃぐしゃの状態でゴミに出されているのを見つけた。

破れた箱の隙間から、袋に入っただまのネクタイが見えていた。

私のプレゼントは、開封さえされずに捨てられていた。

さすがに、耐え切れなかった。

涙を流した。延々と泣いた。朝から晩まで、そのまた朝まで夜通し泣いた。それでも声は押し殺した。それが最後の一線だと心のどこかで気づいていた。

それを越えてはならない。それを越えてしまうと恐らく私は壊れてしまう。ずっと耐え続けてきたのだ。ずっと歯を食いしばってきたのだ。ずっと弱さを出さずにきたのだ。そうしてどうにか、私は強い私を装い続けてこられたのだ。

だからこの一線は、独りでは越えられないのだと理解していた。

孤独のまま越えられるものでも、越えていいものでもないことだけは理解しているのだ。

でも、もうどうしようもなくて。

7年間耐え続けていた私の精神は、あの出来事で崖っぷちまで追い詰められてて。

だから助けて欲しくて。

だけど私は助けてもらって。

なのに会いたくて。

なぜか分からず会いたくて。

思考は既に支離滅裂で。

「ねえ、会いたいよ……」

会いたくて堪らなくなった。

自分がこんな醜い人間だなんて知らなかった。

知ってしまったて死にたくなった。

「会いたい……」

……ああ、もういい。

もうわかった。

ワガママでいい。

最低な人間で構わない。

パパと和解できなくてもいい。

一人ぼっちになっても我慢する。

それさえ叶うならもう何も要らない。

だから。

ねえ。

お願いだから。

何でもするから。

一度でいいから。

もう一度だけでもいいから。

「私は、貴方に、会いたいよ——」

+

+

知らない間に眠ってしまっていたらしい。

顔を押し付けていたシーツに少し湿り気を感じて、泣き疲れて眠りに落ちたのだと気づいた。

身体は相変わらずシャワーから出たっきりの裸のままで、投げ捨てられた枕はフローリングに転がっていた。

枕を拾って、ポンポン、とはたく。ゴメンね、と心の中で謝った。枕は何も悪くない。

窓から差し込む光が眩しい。もう大分日が昇っているらしい。時計を確認すると既に10時を回っていた。寝過ぎたせいか、それとも声を押し殺したまま泣きすぎたせいだろうか、軽い頭痛を覚える。

温度をやや低めに設定してシャワーを浴びた。

冷たい雫が体を伝ってポタポタと落ちる。体を拭きながらふと顔をあげると鏡の中の自分と目があった。目は面白いくらいに真っ赤で隈も出来ている。つい先程まで泣いていました、と言わんばかりの顔だ。

苦笑して、自分の髪を荒っぽくわしゃわしゃと拭う。

「……よしっ」

そうしてようやく気分を落ち着けた。同時に気持ちも切り替える。

もうウダウダと落ち込むのはやめた。

気を抜くと今にも泣きそうになるけれど、それは長年培ってきた自己制御術に縋ってなんとか堪えることにする。孤立を耐えぬく方法なら常に練磨されてきたのだ。こんな時こそ役に立ってもらわないと困る。

そうと決まれば今後の方針。

目的はあの人に会う。

それだけ。ただそれだけを考えて行動すればいい。

それが牧瀬紅莉栖という人間の本音であるからには、それしか考えられないくらいに大切なことであることがわかったからには、他のことは一先ず全て些事とする。

大学が何だ。

立場が何だ。

学会が何だ。

父親が、何だ。

それは全て後回しにする。もう分かってしまったから。牧瀬紅莉栖の本音が分かってしまったから。だから全てはあの人に会った後に考えることに決めた。

会えない、という発想は全て却下する。

あの人は幻なんかじゃない。間違いなくこの世界のどこかに存在している。なら、探し続ければいつかきつと会える筈。根拠も論法も何もかも無視したその考えに従うことに決めた。

クス、と少し笑う。牧瀬紅莉栖とはこんなにも無軌道で無鉄砲な人間だっただろうか。自分の知らない一面が明らかになって何故だか可笑しくなった。

吹っ切れたとは思わない。

けどやけっぱちになったワケでもない、と自分に言い聞かせる。

ただ決めただけ。

全てはあの人に会ってからだと決めただけだ。

「そうと決まればまずは洗濯ね。いい加減もう着るもの無いし。ていうか、年頃の女としてこの現状はないわよね」

まずは散らかし放題になっている服から片付けることにする。

集中してやっつけると、夕方頃にはどうにか片付いた。コインランドリーとの往復はそれなりの重労働だったが、なんとか乗り切った。

そして最後の往復を終えて部屋に戻る前に、ホテルのカウンターでクリーニングに出しておいていた服を受け取る。部屋に戻って、少し気分を落ち着けてからソレを取り出した。

クリーム色のパーカー。日本の高校に逆留学していた時の制服を自己流で改造したお気に入りの服だ。

血塗れのまま放置しておくわけにもいかず、クリーニングに出したまま放りっぱなしにしまっていた。

いや、放りっぱなしにしていた。

お気に入りであるけれど、あの事件をわざわざ思い出すことになるこの服を受け取りにいく気になれなかったのが本音だ。

けれど、押し寄せる不快な記憶の波をぐつと飲み込んで袖を通す。服に罪は無い。

わざわざこの服を着たのは、何も他に着る服がなくなったからでない。いや、確かにもう着るものが無いのは確かなんだけどそれはそれとして。

この服を選んだのは、これが『あの日』に着ていた服だったから

に他ならない。

勿論、こちらから彼を見つけるつもりではある。けれど、向こうが私の姿に気がついてくれる可能性も万が一、億が一、兆が一ぐらいにはあるだろう。

だからこの服を着てその確率を上げる。あの日着ていたこの服装を着ていれば、もしかしたら気づいてくれるかもしれない。

——そう、私に残された選択肢はこれだけ。

この秋葉原をひたすらに歩きまわって探し続ける。

もしかしたらどこかで会えるかもしれない。

その可能性に、すぎる。

袖を通してながら思わず笑ってしまった。どう考えてもまるつきり馬鹿のやることだ。少なくとも理性的な人間の取る行動ではない。

ああ、本当に馬鹿みたいだ。世間が天才だのと囃したてていた小娘はどうやらこの程度の人間だったらしい。それが解って少しホッとした。私はちゃんと人間なんだ。

ブーツに足を通し、トントンと爪先を鳴らしてフィットさせる。ブーツはしっかりと縛っておいた。これからはひたすらに歩き通し

になるのだから、長期的視点で足の負担を軽くしたほうがいい。

丁寧に頭を下げるホテルマンの横を抜けてホテルの外へと出る。ギンギンと照りつける太陽光線に覆われて視界が一瞬白くなった。今年は相変わらずの猛暑らしい。

熱中症には気をつけて搜索しないといけないな、と気を引き締めた。私が倒れちゃどうしようもない。

「……ん？」

ラジオ会館に向かう途中、けたたましくサイレンを鳴らす救急車とすれ違った。

二週間前の私ならどこの病院にいく救急車なのか、興味を示したかもしれない。もしかしたらあの救急車に乗っている人こそが『彼』かもしれない、なんて馬鹿みたいな発想をしてただろうからだ。

そんな事あるワケない。

しかも今日の日付は8月21日だ。あの日からもう既に三週間が経過してしまっている。

あの救急車で搬送されているのが別の人間なことは明らかだ。徹底的に調査したせいで病院関係の可能性は既に全面的に排除されている。未練を抱く余地すらもない。

頭を振って気持ちを切り替えた。他の手段は全て絶たれてしまっている。足を使って捜すしか無いというのは既に結論された答えなんだと、自分自身にしつこく言い聞かせた。

ラジオ会館に到着して、一つ深呼吸をしてからあの人に会う為の
第一歩を踏み出した。

さあ、行こう。

あの人を探しに。

あの人に会いに。

+

+

「今日も収獲無しかあ……」

ホテルに戻るなりベッドに倒れこむ。一日中歩きまわっていたせいで足が棒のようになっていた。元々運動不足の体に、いきなり一日中歩きつ放しなのをかれこれ一週間以上強要しているのだ。無理も無いと思う。

「こんなことならウォーキングを日課にしとくんだった……って今更言っても何の意味もないか。そもそもこんなに歩きまわったら運動不足じゃなくても筋肉痛間違いなしだし」

ベッドに突っ伏したままボヤいた。

そういえば最近独り言が増えたような気がする。聞いてくれる相手もここにはいないので、口から出る言葉は必然的に全て独り言だ。それでも、自分の中で溜め込むより口にするほうが精神衛生上健全だと思う。

過去の偉人も独り言が多かったと聞くけれど、最近の私はその時の気持ちがなくなく理解できてしまいそうだった。

気を抜くと今にも落ち込みそうになる。あまり良くない兆候だ。

だからだろうか。こういう時、咄嗟にあの言葉を思い返すようになったのは。

『俺は、お前を助ける』

あの人の最初の言葉。

ゲームや漫画でしかお目にかかれないような台詞。

それをどこまでも真剣な表情で告げるものだからその抑揚までしつかりと耳に残ってしまっている。妙に聞き取りやすく、染み入る洪い声だった。

我ながら単純すぎると思うけれど、思い返すたびに頬の辺りが熱くなる。なんというか、こう、王女様扱いというかまるでヒロイン役というか……うん、その、ぶっちゃけ懂れてた系の台詞だ。まさか自分が言われるなんて思ってたなかった。

「……ふふ」

思い出していると、いつの間にか頬が緩んでニマニマとしてしまう。ベッドに寝転んでいる時についつかり思い出してしまった時などは身悶えした程だ。思い出しているときの自分の顔だけは見たくない。見たらきつとドン引く。

ふと、前とは別視点であの人の考察を試みることにした。

出会いはラジ館の階段の踊場。出会いの台詞は『お前を助ける』。そのまま颯爽と……ということにしておこう、うん、颯爽と彼は立ち去る。

突然の事でいろいろ置いてかれていた私は、とりあえず当初の目的を達するべく父親に会いに行つて、そして文字通りの修羅場となった。

そこに彼が来てくれた。

もう少しで手遅れになりそうなところに駆けつけてくれた。

言葉通り、本当に助けに来てくれた。

そしてわざと自分を悪者とするかのように演じて、自分を顧みずに私を庇つて、気を失った私を守り通してくれた。

とまあ、こんなところだろう。ある種のフィルターにかけて思い返すところになったりした。

「って、何そのギャルゲ!？」

思わずツツコんだ。

だって初めて出会った時の言葉が『お前を助ける』とか。

それで本当に助けてきてくれるとか。

しかもちよつと遅れてやってくるとか。

それでいてちゃんと助け通してくれちゃったりするとか。

何それヒーロー？ それに助けられた私はさしずめヒロイン？

……これはヒドイ。

あの人がヒーローで私がヒロインとか……どっちがとは言わないけれど、いやなんというか。

ないわー。

「いや、そりゃ私だって、こう……憧れみたいなものはあるのよ？
これでも一応、女の子だし……」

誰に言うわけでもなく言い訳をする自分が少しうらめしい。

「そつえばちよつとかつこよかったな、あの人」

何かと不精な感じではあったけど身なりをちゃんとしていれば普通にレベル高いんじゃないだろうか。いや、それともあの格好だか

らこそかつこいいと感じたのかもしれない。どっちだろう。

軽く想像してみる。

服装は白衣だからおかしいのであって、これが冬でトレンチコートだったりすると普通にイケそうな気もする。

でも今は思いっきり夏なので、白衣を外してちゃんとした夏用のジャケットを着せて……いや、あの人の風貌ならもっとしっかりした服装のほうがいいかな。

でもスーツなんかだと場違いな気もするから……ブラックジレなんてどうだろう。後は髪を整えて無精ひげを剃れば言う事なし。

うわ、やばい。普通にかっこよさそうだ。

「……自重しよう」

テンションが変なことになっている。

頭の中で恩人を着せ替え人形よろしくいろいろな服装を試している私は人間としてどうなんだろう。

落ち込みかけていた気持ちはどこかに行ってくれたが、恩人の風貌を妄想して一人でニンマリ笑ってるのか。これではまるで喪女だ。

——分かっている。

これは逃避だ。あの日の出来事から、都合のいい部分だけを抜き出して精神状態を落ち着けている。

これはある種の冒流行為ですらある。それも分かっている。けれど……そうでもない能耐切れなくなりかけている自分を既に理解してもいた。

ゴロンと寝返りを打ってベッドから起き上がる。シーツを涙で濡らしている時間もなければ妄想にふけっている時間もない。

そろそろ軍資金も心もなくなってきたし、さすがにママだけには改めて連絡をいれとかなければいけないだろう。そうしておかないとアメリカから来日して直接連れ帰りに来かねない。

小言では済めばどれだけいいかと思うが、さすがにそこまで樂觀的にはなれなかった。怒りの言葉が襲いかかってくるのは確定的なので、ちよつとした覚悟をする必要があるだろう。

ふう、と一つ深呼吸をする。電話帳からママの番号を呼び出して通話ボタンを押した。何度かコール音が鳴って相手が電話にでる。先手を打ってすかさず用件を伝えた。

「ハロー、ママ？ 私、紅莉栖。突然で悪いんだけど、私しばらくアメリカには帰らないから」

言った瞬間。想像以上の怒号が帰って来て耳朵を強烈に打った。

み、耳がジンジンする……。分かってはいたけどかなり本気で怒ってるらしい。

「ちょ、待、そりゃ私も講義の予定ぐらいはちゃんと覚えて——え、いやいやそんなことでもなくて、パパ……じゃなくて、ドクター中

鉢とのことはもう完全に諦め——ちょ、待ってママ！ それだけは本当に待って！ カード止められたら最悪路上生活するしかないな——うわ、わかってるってば、そんなこと私がするわけないでしょ……いや、けどカード止められたら本当にそうするしかないかも——

——ゴメン、ママ。後で死ぬほど謝るから。今はワガママを許して。私はまだアメリカには帰れない」

怒号を放ち続けるケータイの一方的に切って、更に電源も落とした。切った電話の向こう側で、怒りの形相をしたママが何度もコールバックしようとしている姿がありありと想像できた。

ママと大学には悪いと思っている。

流血沙汰の事件に巻き込まれた娘が、未だに現場付近をうろちょろしているなどと聞かされては気が気でないだろう。

私にとってママは感謝してもしきれない人だ。登校拒否になりかけた私を、海外留学という手段で引っ張り上げて人間不信から直してくれたのはママだ。

中学校からはママが一人手で私を育ててくれた。

そんなママに心配をかけさせっ放しで、本当に悪いと思ってる。

大学とてそうだ。

私のような若輩者を受け入れてくれたヴィクトル・コンドリア大学はメンツを潰され、講義をする予定だったリーハイ大学もかなりの迷惑を被ることとなった。

リーハイ大学からは私の講義を熱望していた生徒もいると連絡を受けていた。多少のお世辞が入っているにしても、講義を聞くためにわざわざ他大学からも参加者がいるのは私だって知っていた。本当に申し訳ないことをした。

この一件は私のキャリアに大きな影を落とすだろう。政治力もかなり失ったと見るべきだ。完全に私のワガママからなるものだから申開きも出来ない。完全無欠に自業自得だ。

だけど、それでも。

どうしても私はアメリカに帰るワケにはいかないのだ。

あの人を見つけるまでは。

あの人に会えるまでは。

そして現在に至る。

徒歩での搜索を始めてからかれこれ一ヶ月が過ぎようとしていた。季節はもう秋に移りつつある。

この一ヶ月、ラジオ会館を中心とした秋葉原全域を搜索範囲として彷徨う毎日を送っている。

あの日からの、7月28日から経過したこの二ヶ月弱で既に何周もしてしまっているので、大分地理にも明るくなった。何となくあの人の興味を引くであろうと思ってしまった裏路地の胡散臭い露店なんかも、どこにあるのかほぼ完璧に記憶してしまっている。

勿論、一度探したところはもう探さない、なんて事をする意味はない。

そもそもこの搜索自体が偶然のニアミスを狙ってのものなのだ。

手がかりがない以上、同じ場所であろうがなんであろうが、出会った場所であるラジオ会館を中心に当て所なく彷徨うぐらいしか出来ることはない。

「それでも諦めないんだから、ホントどうかしてるわよね」

わざと自嘲する言葉を口にしたりしてみた。ああ、ホント。なにしてるんだろうな、私。

——本当は気づいている。

いや、そんなものずっと前から気づいていた。

あの人とはもう二度と会えないだろうだなんて、そんなこと、もうとつくの昔に気づいていたんだ。ただ気づかないフリをしていただけだ。

最初の三週間、思いつく限りの可能性をあたってみても何の手がかりもなかった時点で薄々そんな気はしてた。

それでも諦めるなんて選択肢はあり得なくて。

もう会えないかもなんてことを考えるだけで頭がおかしくなりそうで。

だからこうしてニアミス狙いでアテもなく彷徨うなんてことをし始めた。

その僅かな可能性にすがりついた。

「もうどうしようもないまでに意地汚いな、私」

今では足もそれほど痛くない。体力だって大分ついたと思う。朝から晩までひたすら歩き通すなんてハードワークを一ヶ月も続ければ当然の結果だろう。おかげで体重もごっそり減ってしまっている。全然嬉しくなかった。

ここまでしても諦められない。どうしても会いたい。私が今この街にいられる理由はこれだけだ。

「さて、と。今日はどこから探そうかな」

ラジオ会館の前で、私は私を騙すための言い訳をいつものように心でつぶやく。

大丈夫。きっと会えるはず。探し続けていればいつか。きっといつかは会えるはず。

もう合言葉みたいなものだ。それとも呪文だろうか。あまりに繰り返すすぎて頭の中で延々とリピートされているような気さえする。

「ん——」

二度と会えないだろうと改めて自覚してしまったせいか、不意に目の奥が熱くなった。ラジオ会館を見上げているふりをして、零れないようグツと堪える。少しだけ零れかけた涙を拭って前を向いた。

私は探すんだ。

あの人に会う為に。

あの人に会えるまで。

いつか会える。

探し続ければきっと会える。

会えないのならば会えるその日まで探し続けるまで。

そうして私は、買い物客でこつた返す中央通りを、まっすぐ前を見つめて歩き出し――

どこかで見た、場違いな白衣。

「……………え？」

呆然と私は立ち尽くした。

それまでの、なんだかぼんやりした、悟ったような気持ちが吹っ飛んでいた。

いま、何かすれ違った。視界の端に引かなかった。見逃せるはず

もない彼の姿を見た気がする。

幻じゃない。絶対にだ。これに限っては見間違いなどあり得ない。あの日以来、常に脳裏に描き続けていたその姿を見間違えられるはずもない。

心臓が早鐘を打つ。思考は完全に停止した。石のように固まった体は一向に脳の命令を受け付けようとしない。

振り向かなければならない。見失ったらどうする。今すぐ振り向け。

理性がそう叫んでいるというのに、体が命令を受け付けない。あまりにも望外の出来事に体が反応しなくなっている。振り向くのが怖い。振り向いた先にその姿が無かったとしたら、私はきっとダメになる。

凍りついた思考に代わって、衝動とも言つべき何かが、ゆっくりと私を振り向かせた。

——いた。

あの暑そうな白衣が、数歩ほど離れた街路樹の影で音を立ててなびいていた。バタバタとはためく白衣の音が、この喧騒の中でもはっきりと耳に届く。

白衣だけじゃない。それはこの二ヶ月の間、夢想し尽くした姿だった。

屋外であるにも関わらず律儀に着込まれている白衣。荒っぽく逆

立てて無造作に固めた髪。不相応に年輪を重ねた瞳。何かを悟ってしまったかのような顔立ち。驚いたように私を見つめるその表情。

あの日の彼が、そこにいた。

「……やっと、会えた……」

呆然としたまま、口が勝手に動く。

これは本当に現実だろうか？ 私は夢を見ているんじゃないだろうか？ だとしたらもう二度と目覚めるな。このままずっと眠っていればいい。

確かめずにはいられない。確かめなければいけない。そうしなければ彼が幻じゃないと確信を持てない。私はそこまで自分を信用できなくなっていた。

震える足で一步近寄る。その動作にすら勇気が必要とした。歩み寄る間にも、私の口は勝手に想いを吐き出し続ける。

「あなたを、ずっと探していました。あのとき、助けてくれたあなたを、ずっと——」

彼も同じように私を見て固まっていた。呆然とした表情でひたすらに立ち尽くしていた。

手を伸ばせば届く距離にまで歩み寄る。それでも彼は消えなかった。そして私はようやく理解する。幻じゃない。現実だ。嘘みたい。信じられない。

目の奥が熱を帯びた。喉の辺りが勝手に震え始める。込み上げてくるものを堪えようとするあまり唇までが震えていた。どうしよう。おかしい顔をしていないだろうか。どうしよう。変な女だと思われる。いないだろうか。

「私、一言、お礼が言いたくて、どうしても、あなたに会いたくて」
嗚咽のようにつかえつつかえしてどうにか言葉を紡ぐ。その言葉の皮切りに凍っていた思考が氷解し、激情に近い感情が溢れ始めた。

理性が感情に押し流される。最初に溢れてきた感情が強すぎて止まらなくなった。

だから瞳に浮かび始めているのは。こらえ切れなくて抑えきれなくて瞳からこぼれ落ちそうになっているコレは、今まで流したことがないモノだ。

ああ、嬉しい。

ただ、嬉しい。

心から、嬉しい。

あなたに会えたことが。

あなたに逢えたことが。

あなたにお礼を言えることが。

そして何より――

「本当に、ありがとう……あなたが無事で、よかった」

――あなたが、生きていてくれたことが。

嬉しさがひと筋頬を伝った。それを見て彼はことさら驚いたような、泣き出しそうな、叫びだしそうな、そんな表情を浮かべた。

もう抑えきれない。こんなの抑え切れるもんか。ありとあらゆる感情が堰を破って溢れ出している。こんなのは18年間生きてきた人生の中でも初めてだ。頭の中が混乱してワケがわからなくなった。

そうして気がつけば、彼はケータイをすらりと取り出し、右耳に添えるところだった。クリムゾンレッドのストレート型。発表会の会場から連れ出した際に、彼が使っていたケータイ。

彼は戸惑う私を余所に、唐突に誰かと電話をし始め――その行為に、私は谷底に突き落とされたような気持ちになった。

何故？ 何で電話をし始めるの？

ここに私がいるのに。目の前に私がいるのに。

まさか私が分からないのだろうか。あの日出会っただけの私を、彼はもう忘れてしまったんだろうか。そうとしか考えられない。泣きそうになった。

彼は携帯に向けて何かよくわからないことを喋っている。けれど言葉が耳に入らない。音として届いても言語として処理できない。

ただ私を無視したその行為が、私の心に深く深く突き刺さっている。痛みで脳まで貫かれたかのような錯覚。世界が滲んだ。

どうしよう。泣きそう。逃げたい。死にたい。お願い。僅かでもいい。微かでもいい。一瞬でもいい。私を思い出してほしい。

どこまで卑しい女なんだ私は。ここまで来ても自分勝手。わがまま。独善的。会えただけで奇跡だというのに。お礼を言えただけで本望だというのに。牧瀬紅莉栖はこの期に及んでそれ以上を望んでいる。

本当に死にたくなつた。

逃げ出しそうになる気持ちを押し殺して彼の顔を見上げる。

ほんのちよつとでいい。お願い。それさえ叶えば他に何も要らない。ただでさえ死んだも同然だ。だからもう死んだっていい。だから。ねえ。お願いだから――。

あらゆる想いとたつた一つの願いを込めて、すぐるようにつめ続ける。

端から見れば捨てられた犬のような目をしていたかもしれない。

そうしてただただじつと彼の顔を見上げていると、彼は困惑したようにケータイを白衣のポケットにしまった。どこかバツが悪そうにひとつ咳払いをして、彼は私の顔を見てその口を開く。

私はその一言一句をも聞き漏らすまいと耳を澄まして――

「また会えたな、クリスティーナ」

いや、だから。私は――

「いや、だから。私はクリスティーナでも助手でもないと言つてろ
うが――」

――言葉を失った。

「え？」

私と彼の言葉が重なった。

待つて。私は今、何を言ったのだろう。

「あれ、私……今、ふっと頭の中に言葉が浮かんで……どうして……？」

クリスティーナでも助手でもない？

なにその台詞？

クリスティーナは今彼が口にした呼称だ。けど、助手って何だ。彼はそんな事一言も口にしていない。なのに勝手に言葉が浮かんできた。気づけば既に言ってしまった後だった。驚くほど自然に私の口は言葉を紡いだ。

わからない。何で私はこんな台詞を言ったんだろう。

それが仮にも恩人に対する言葉遣いなのかだとか、そんな常識的

な自答は彼方に消え去ってただただその疑問で思考が埋め尽くされた。

彼の目をじつと見つめる。何故か知っている気がした。確証も論拠もなにもないけれど、きつとその答えをこの人は持っている気がする。これは直感の類だろうか。わからない。けれど妙に確信している私がどこかにいる。

やがて彼は驚愕の表情を一度消してから、ほんの僅かに微笑を浮かべた。

「ようこそ、我が助手、牧瀬紅莉栖……いや、クリスティーナ」

言葉の意味は唐突すぎて分からない。けれどその言葉に何故か再び泣きそうになった。

多くの人が行き交う中央通り。雑多なこの街の、秋葉原のメインストリート。その喧騒の中で彼は何かを白衣のポケットから取り出す。

ああ。知っている。私は彼が何を取り出そうとしているのかを知っている。そしてそれは私がずっと欲しがっていたものに違いない。

時計の歯車のような意匠が施された、小さなピンバッチ。

刻印されているのは西暦と思わしき四桁の数値。それに八文字のアルファベット。

今の私には意味の分からない英字の羅列。

だけど大切なモノに違いない鍵言葉。

彼はそのピンバッチを、優しい手つきで私の手にそつと握らせた。

だから嬉しくて。

なぜか嬉しくて。

ただひたすらに嬉しくて。

どうしようもないほどに嬉しくて。

まるで宝物のようにそれを胸に抱いた。

彼は目尻に涙を浮かべながら、どこか満たされたように微笑んで言う。

その表情で。

今度こそ私は満ちてしまつて。

耐えがたいほどの多幸福感に包まれて。

だから溢れて。

止めようもなく溢れて。

何よりも暖かな雫を流しながら、彼の言葉を受け止めた。

「これが<シュタインズ・ゲート>の選択だよ――」

今日は2010年9月16日。

時刻は15時43分。

天気は輝かんばかりの晴天。

私は今、秋葉原にいる。

岡部と共に、此処にいる――。

了

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8524u/>

境界面上のトラリスト

2011年7月28日06時13分発行